

ている。

在日高齢者に向けたサービスの試みとしては、朝鮮語・朝鮮料理のできる在日同胞ホームヘルパーの養成や、在日高齢者交流クラブ「トラジの会」などがある。「トラジの会」では、週一回、会食会という形で、在日高齢者が一緒に朝鮮の家庭料理を食べ、体操をしたり、歌を歌ったりして楽しく過ごしている。多くのハルモニ（おばあちゃん）・ハラボジ（おじいちゃん）は、同胞に出会える場所として、色々な苦勞を抱えながらも通って来ている。

ハルモニたちは底抜けに明るい。ハルモニたちの笑顔を見ていると、「なぜ？」と言った疑問と、私たち日本人の過去の行為や、法制度の不備に怒りが込み上げてくる。何とかしたい！日本を変えたい！そう思っても、国・県・市・区・町…大きい単位での事象ほど、変えていくのは困難である。青丘社の方々は“小さな単位で…”“地域に根ざした…”と皆が口を揃えて言う。変革は、地域レベルでの活動からはじまる。私たち一人一人

が、ほんの少しの活動をするだけで、在日外国人が今より豊かに暮らしていくことも可能はずである。

時代が進むにつれて、人とのかわりが薄くなってきている。「ご近所付き合い」も、今では昔の言葉である。そうではなく、今こんなことに困っているとか、この前こんなことをしてもらったら嬉しかったとか、日本人とか外国人とかに関係なく、コミュニケーションをとっていったらいいのではないだろうか。それが“ふれあい”なのであろう。

市民活動、地域活動は小さな個々の小さな活動からはじまる。まずは、もっとミクロな視点を持たなければならない。ふれあい館周辺の方々は皆、私が見えていないものが見えていた気がする。しっかり足元を見て、身近にいる外国人の人が、仲良くなったハルモニ・ハラボジたちが、少しでも微笑んでくれるように、私たち一人一人が心掛けていけばいいのではないだろうか。

JICAによる開発協力とサモア教育 ——サモアでのフィールドワークを通して——

許 盛恵

サモアの就学率は高く、基礎教育は量的には充実している。しかし質的な面を見ると、基礎学力、教師とカリキュラム、教材の普及、教育施設などが不足するという深刻な問題がある。また高等教育施設も非常に不足しており、必要とされる人材の養成が充分にできない現状である。

日本国際事業団による教育協力活動では、JICA職員はサモア経済、社会、教育などにバランスをとりつつ開発に関わり、最近では教育への援助への重要性を高めている。JICAの専門家は、サモア教育関係者とのコミュニケーションを確立し、相互の情報交換を行い、他のJICA派遣人材が大学の中で有効に働けるように調節する役割を果たしている。

シニアボランティアと青年海外協力団は、言語の壁、カルチャーショック、要請と現実との違いなどの困難を乗り越えながら、サモア教育

発展に役に立ちたい一心で一所懸命活躍している。ただとJICAの援助政策や実施方法については批判も聞かれた。現場で活動しながら観察したサモア教育の実態は、基礎教育が徹底されていない、教育システムや教材が完備していない、それに先生の質がかなり低く、再教育が必要なことであった。ニュージーランドの教育カリキュラムをそのまま使っているのだから、サモア人には合わず、進学試験のための教育になっているとの批判が挙げられた。さらにカウンターパートとのコミュニケーションがうまくいかず、有効な教育協力ができないことが残念である。

サモアの学生へのアンケートでは、日本に対して先進国、新しい商品の開発地、科学技術が発展している国というイメージを持っていた。サモア教育のシステムについては先生の知識不足、テキストの不足、貧相な学校の設備などに不満を感じ、その不足さを補完するコンピュー

ターや教材面での日本の協力を望んでいた。大学生では、学位の取得と高等教育ができる教育環境や施設への要求が強かった。

このようにサモア側では基礎学力、教師とカリキュラムなどの質的改善が必要であり、特に理数科教育の振興が大きな課題である。そのために海外からの協力が求められ、特にカウンターパートをうまく利用しなければならない。一方日本側は、

サモアの教育の現状に即した教育援助プロジェクトをつくり、ボランティアたちの語学力をさらに向上させるという良質の援助が必要である。特に日本で進んでいる理数科教育の分野で積極的にかつ長期的な視野に立って援助計画を作成するべきである。さらに計画を策定して、協力し合うのが大切であろう。

高知県の自然災害について

百田 和加

本研究では、高知県でどのような種類の自然災害があり、どのような被害がどの程度発生しているのか、正確に認識することを試みた。

資料には、高知県消防交通安全課がまとめた1991～2000年の災害記録を使用した。それから『自然災害一覧表』を再編集し、さらに被害別に分類した結果、全体の自然災害件数のうち豪雨が約53%、台風及び豪雨が約28%、その他が約9%だった。また被害別分類では、豪雨による被害は、人、建物、農林業水産施設、畜産、商工に特徴的に発生していた。台風及び豪雨による被害では、罹災者数、公共土木施設、公共文教施設、水産被

害、その他の被害が特徴的だった。総じていえば、高知県の自然災害において雨が関わる水害が代表的であることがわかった。

また、警報・注意報、災害対策本部についても分類をした。警報・注意報では、東部・中部で大雨・洪水警報の発令が多く、西部で大雨・洪水注意報が発令される回数が多いことがわかった。災害対策本部の設置回数、市町村数を見ると、ともに台風及び豪雨時に多かった。

「災害記録」は、作成基準や方法が未だ確立されていない。今後の防災対策のために急ぐべきであろう。

北アルプスで増加する中高年女性とその行動

森脇 理恵

1980年代後半から中高年登山者が増加し、百名山の流行ともなって、中高年の登山は爆発的なブームとなった。1990年代後半には新たに中高年女性登山者が増加した。本研究では、最も人気のある北アルプスにおいて、彼女らの意識と行動を分析し、増加の原因について考察した。北アルプスの山小屋7軒でアンケート調査を実施し（回答数473）、山小屋関係者を含めた聞き取り調査を実施した。

結果によると、北アルプスにおいて、中高年女性登山者は男性と比べて登山歴が短い傾向がある。中高年になって時間に余裕ができ、健康を気遣うようになり、登山への関心を高めていったこと、また、中高年登山ブームによって山小屋、交通手段、山の装備などがよくなったことが中高年女性

登山者の増えた原因である。

ここ数年のうちに登山を始めた中高年女性は、山岳会に入会するなど積極的に仲間を広げており、中高年男性よりも年間山行日数が長い。そのとき、単独ではなく、夫婦・家族などのほか女性同士のグループで行動をしている。

中高年女性は、アプローチが短く、危険箇所が少ない山を好む。なかでも初心者には立山・乗鞍岳のように手軽にいける山や、白馬岳・常念岳のように、アプローチが短く危険箇所がなくお花畑などの自然を楽しめる山に登っている。剣岳・槍ヶ岳・穂高岳のように一般的に人気があっても、岩場などが多く、難易度が高い山にはあまり登っていない。

また、黒部五郎岳・鷲羽岳・水晶岳・雲の平な